

じゅうぜん通信

2010 SUMMER No. 27



～ナツツバキ～



日本医療機能評価機構
認定病院 (Ver. 6)



【病院理念】

社会福祉法人病院として、地域に密着した医療を行ってきた
歴史を守り、『救急から在宅まで』を目標に、
患者さんが満足し、職員も満足する病院づくりを
実現することにより、地域住民の
保健・医療・福祉の向上に貢献する。

The Contents

理事長挨拶 副院長挨拶 理事長・院長退任挨拶
診療報酬改定 訪問リハ開始 感染通信
出版「お見合い放浪記」

理事長・病院長就任のご挨拶



理事長 小川 繁晴

6月1日より社会福祉法人十善会の理事長、十善会病院の病院長に就任いたしました。もとより薄学非才の身ではありますが、医療、福祉を通じて社会に貢献する十善会をさらに発展させるべく全力を尽くす所存であります。副院長に笠脳神経外科部長と麻生内科部長の両名が就任しましたことも併せて報告いたします。

十善会病院の前身である十善寺病院は柳川藩の御典医であった高木文章先生により1875年に設立されていますから135年という長い歴史を経て現在に至っています。その間、医療法人、公益法人と名を変え1958年に現在の社会福祉法人に改組され、医療法人より数えて今年が節目の60年目に当たります。この長い歴史の中において当病院は地域医療の中核的な役割を担い続けているものと自負しています。特に長崎に原爆が投下された後の数ヶ月に亘り被爆者の診療に絶大な貢献があったことは現在までも語り続けられているところであります。

その歴史、意志を引き継いでいる私どもは、長崎市における医療を、特に救急部門を通じて支えています。十善会の理念は「救急から在宅まで」であります。十善会は病院を中心にした組織ではありますが、予防部門として検診センターを、在宅部門として在宅総合支援センターを併せて運営しています。救急医療を中心にした一般病床を運用する全過程において、患者様の在宅における生活を念頭に置いて対処することを心がけています。また社会福祉法人としての使命である生活困窮者への援助に心を配ることは当然であります。また2009年より脳卒中センターの指定を受けて、長崎市の脳卒中医療の診療に寄与しています。

このような輝かしい伝統を誇る十善会を私が理事長として支えていくには力不足ではないかと自問自答の日々ではありますが、職員や地域の人々の協力を得つつ業務を遂行する所存であります。今後も十善会への御支援をよろしく願います。

副院長就任のご挨拶



副院長 笠 伸年

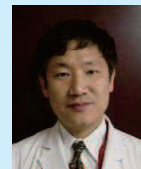
平成22年6月1日付けで副院長を拝命いたしました。簡単ではございますが一言ご挨拶申し上げます。

私が十善会病院に初めて足を踏み入れたのは昭和61年、研修医の時に長崎大学病院からの患者様搬送に付き添って訪れた時でした。その時は“なんて狭くてごちゃごちゃした病院だろう”と思った記憶があります。そしてその年の年末、先輩医師に連れられて十善会病院の忘年会に参加した時の衝撃！退廃的かつ妖艶な雰囲気は今でも鮮明に思い出されます。よそ者の多くは“長崎”という名前に憧れを抱くものですが、十善会病院は古き良き時代の長崎の匂いがぶんぶんする病院でした。

初めての十善会病院勤務は平成5年8月でした。栗原正紀脳神経外科部長（現長崎リハビリテーション病院理事長）と二人でばたばた忙しい中、寝る間を惜しんで飲みに行き、急患が来たら病院に戻るといった生活でした。平成6年から後輩が赴任し脳神経外科は3人体制となりました。平成8年9月から平成13年5月まで長崎大学病院勤務に耐え忍んだ後、平成13年6月に栗原部長の後任、3代目脳神経外科部長として再び着任しました。着任初日の夕方から早速緊急脳動脈瘤クリッピング術があり、実はクリッピング術は5年ぶりでどきどきしていたのですが、さも慣れているかのように振る舞い周囲に不安を悟られないように気を使ったことを思い出します。その後は良き先輩、後輩医師や看護師、リハビリ等の仲間に恵まれ、時には仕事に悩みながら、酒に関する失敗は数知れず、丸9年が過ぎ現在に至っております。考えてみれば医者になってからの24年間のうち半分の12年は十善会病院に勤めていることとなります。

このように憧れの長崎の街にあって伝統ある病院でありながら、昔から身近に存在していた十善会病院の副院長に就任したことは光栄であると同時に身が引き締まる思いです。副院長という立場、仕事内容は未だよく把握できていませんが、別に人間が偉くなったわけではなく、背負う責任が重くなったということで、組織における役割分担の1つだろうと考えます。浅学非才かつ楽道家である私が果たして重責を担うことができるのか疑問が残るところですが、昨今の厳しい医療業界のなかであっても、患者様のためを第一と考える、長崎に住む人々から頼りにされる、そんな十善会病院であり続けるために皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っております。更に、みんなが自由に意見を言える雰囲気があって、一生懸命まじめに頑張る人が決してバカをみない“愚直”であることで損をしないという職場であって欲しいと願っています。

副院長就任ご挨拶



副院長 麻生 憲史

この度、平成22年7月1日付けで副院長を拝命致しました。簡単ではありますがご挨拶させていただきます。十善会病院へは平成16年6月に呼吸器科部長として長崎大学熱研内科より赴任致しました。その後、平成17年4月より内科部長をしています。

さて、前回のじゅうぜん通信でも申し上げましたように、現在当院では内科医師が不足しており、患者さんおよび地域の先生方にも御迷惑をおかけしています。今後、速やかに内科医師を補充し診療体制を整え、皆様のお役に立てるよう努力したいと考えている所です。

現在出来る事としまして、目の前の患者さんを一人一人丁寧に、心をこめて診療することで、患者さん・家族そして御紹介頂いた先生方にも満足頂けるような病院を築いていきたいと考えております。

理事就任のご挨拶

理事 深堀 愛子

十善会勤務25年目となり、勤務医として一つのパターンが出来上がった時期に、新たな職場に変わった様な気持ちで毎日を過ごしています。ふと気が付くと、今まで見えなかったと言うより見ないでいた諸々の病院での出来事やスタッフのそれぞれの役割などを注意して見守っている私がありました。これからもより働きやすい病院（職場）となるように、また、より多くの患者様に利用して頂けるような病院作りに少しでも役立てればと思っております。

理事長退任にあたって



前理事長 小路 敏彦

皆様、梅雨のむし暑い時節に入りましたがお元気ですか？私は、この6月で理事長を退任いたします。長大医学部からのクラスメート高木忠一郎前理事長ご逝去のあとを受けてまる十年の歳月が経ったこととなります。

さすがにこの十年を思い返して色々な感慨に胸迫るものがあります。その大部分は皆様方に甘えてご苦勞ばかり強いてまいったことのように、深く感謝と共にお詫びを申し上げます。ことわざにも「勇将のもとに弱卒なし」と申しますが、弱将をかかえた幹部の諸先生方、各診療部門、看護部、薬剤部、事務管理部、健康管理、医療福祉関係、その他膨大な各委員会の全職員の方々に深い敬意、感謝の念を繰り返し、繰り返し表明させていただきます。ありがとうございました。

さて、日本の西洋医学伝来史のルーツを辿る上からも、この十善会病院草創の歴史は幕末から明治維新にかけての手に汗にぎる洋学伝来史の一翼を担っていた事実を知る人はすくないように思われます。

話は幕末にさかのぼります。1853年、かの米国ペリー率いるいわゆる黒船の浦賀入港、一月半おくれでプチャーチン提督率いるロシア艦隊の長崎入港、この二つの出来事を契機に江戸幕府は洋式海軍の創設を決定し、オランダ政府に援助を要請したのです。その結果、1855年オランダから西洋海軍伝習生が長崎に始めて来航し、以後西洋医学習得の必要を痛感した徳川幕府は西洋医学習得に必要な医師の派遣もオランダ政府に要請しました。その結果、西洋医学の公的教育機関としてオランダ海軍中尉ポンペ以下の医療隊が1857年はじめて長崎に上陸したのです。西洋医学が始めて日本に組織的に訪れたのは、この長崎でした。

ポンペは、長崎に医学伝習所を開設し松本良順ら12名の日本人に西洋医学の講義を伝達しました。まず、物理化学から始まって解剖、生理、薬理、病理の基礎医学から次第に内科、外科などの臨床医学へと医学教育をすすめていきました。

そのため長崎は我が国の西洋医学発祥の地として位置づけられ、その後浦上に医学部が設置されることにも大きな影

響を与えたのです。十善会病院の創設者である高木文章先生の眼力と実行力には改めて敬服するばかりです。現在の地に十善会病院を創設されたのも臨床医学創設の地、小島養成所からなるべく離れたくない存念があたりだったとうかがっています。

そして、遂に長崎医科大学が創設されるまでに、長崎は西洋医学発祥の一翼を担ってきました。また、私たちの十善会も多くの犠牲者をだした原爆にも耐え、救急病院として大変な活躍をかさねてきました。

今日、医学界が山のような難問をかかえていることは、重々承知していますが、この歴史ある病院をどうか諸先生方はじめすべての関係職種の皆様方でさらに発展させ、今一度、数々の危機を乗り越えた先輩方の苦難を偲び、新しい日本の医学、医療の先頭に立つ気持ちを持って頑張ってください。「現実の苦しみを乗り越える鍵は、新しい工夫、発見と同時に過去の苦しみを突破した実績の中にある。そして、全員の一致協力である」と私は信じています。では頑張ってください、さようなら。

理事・病院長退任のご挨拶



木原 正高

平成22年6月30日をもちまして、理事・病院長を退任することとなりました。十善会に奉職して28年、そのうち副院長1年半、理事・病院長10年を務めさせて頂きました。

平成7～9年の本館の大改修、平成12年の高木忠一郎前理事長、病院長の死去、クリティカルパス・電子カルテ・DPC導入や亜急性期病床設立などが記憶に残ります。

昨今の厳しい医療情勢の中、これからも伝統ある十善会の更なる繁栄を希望しております。患者さんはじめ、職員・関係の方々には在任中大変お世話になりました。お礼申し上げますと共に感謝いたします。



訪問リハビリテーションを始めました。



十善会訪問看護ステーション
作業療法士 桑原 聡子

今年2月から十善会訪問看護ステーションに作業療法士が加わり、訪問リハビリテーションが開始となりました。病院でのリハビリを終え、退院していざ家に帰ってみると「あれ？ここでつまづいていたかしら…？」「にんじんがこんなに硬くて切れないなんて…」など、実際に在宅での生活を始めてみて今までなかった不便さや、できないことが増えたと感じる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？その

様な場合は、是非訪問リハビリテーションをご活用下さい。訪問リハビリテーションでは困ったことを一緒に解決し、自分でできる方法などを練習することができます。また色々な生活上の動作の相談や住宅環境のアドバイスもできます。「頑張ってみよう！」「頑張ろう！」ではなく「リハビリにきてくれるけん！頑張れる！」利用者様と『heat to heat』のお付き合いができればと思います。いつでもお気軽にご相談ください。



平成22年度診療報酬改定についての説明

～9点の再診料(病院) アップ～

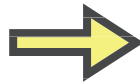
今回の診療報酬改定は、政権交代を実現した民主党に代わってからの初めての改定になりました。医療崩壊の現状を打開すべく国民・医療者とも期待する改定でした。しかし内容は「実質ゼロ改定」といわれ、これでは「医療崩壊」の改善は難しいと医療者からは声が上がっています。今後、民主党のさらなる改革に期待したいところです。さて、今回の改定で患者様に直接関係のある当病院での変更項目を紹介したいと思います。

① 再診料が診療所と200床未満の病院で統一

690円(69点) 当院も診療所と同じ再診料になりました。

改定前は・・・

60点が



改定後は・・・

69点に

② 明細な領収書(明細書)の発行義務化

レセプトの電子請求を行う医療機関は、「**正当な理由**」のない限り診療の都度「項目ごとに記載された明細書を無償で交付しなければならない」とされ、当院でも平成22年4月1日より改正に合わせ交付しております。

③ CT撮影マルチスライスが「16列以上」と「16列未満」に区分

当院でも、CT装置の更新を行い、128列マルチスライス機を導入いたしました。今まで以上に、鮮明な画像で画像診断に貢献出来る事と思っております。

④ ジェネリック医薬品(後発医薬品)の更なる使用促進

当院でも、医療費削減のため**後発医薬品**の使用促進に取り組んでおります。

⑤ 後期高齢者を対象とした点数の廃止

算定対象の年齢の変更が行われました。生活習慣病管理料など前回の改正で年齢をもとに点数を分けると批判があった項目が廃止になりました。

⑥ 地域連携診療計画管理料に診療所・介護サービス事業者の追加

脳卒中・大腿頸部骨折について、当院では診療計画に基づき回復期病院や診療所介護サービス事業者と地域連携を行っています。

⑦ 急性期入院への重点配分

早期退院、転院、在院日数短縮につなげるもの、栄養サポートチーム加算の新設、救急医療管理加算の引き上げ等、包括医療(DPC)の点数改定等が行われました。

その他にも、がん・認知症・肝炎インターフェロン治療などの点数の新設も行われています。最後になりますが、当院では「救急から在宅まで」を目標に、地域の皆様の医療に邁進しております。今回の改定を踏まえて、更なる地域医療の在り方を模索していきたいと考えております。今後とも、皆様のご支援ご指導をよろしくお願い致します。



感染通信

～手足口病～



新型インフルエンザの話題も落ち着き、夏本番となりました。しかし、異常気象のせいでしょうか、気温も不安定で体調管理が難しい状態です。あまり知られていない病気ですが、例年ならば6～7月にかけて流行のピークが見られる夏型感染症の手足口病が今年は5月初旬から患者数が増加しています。

手足口病とは口腔粘膜・手のひら・足底に水疱を形成するウイルス性発疹症です。典型的な例では、軽い発熱・食欲不振・喉の痛みで始まり、発熱から2～3日で、発疹を形成し7～10日で自然消退します。予後は良好ですが、ごく稀に無菌性髄膜炎を併発することがあり、経過中に元気がない・頭痛・嘔気を伴う発熱が2日以上続くなどの症状が見られる場合は慎重に対処する必要があります。年齢層は乳児期を中心に学童期（稀に成人）にもみられます。感染者の鼻汁や便などの排泄物・咳などによる飛沫から経口的うつる為、手洗いやうがいを励行し日常的に清潔を保つように心がけることが必要です。

出版しました！ ～お見合い放浪記～

橋口 幸子

皆さん、こんにちは。十善会病院6階病棟に所属の看護師橋口幸子です。この度、私のコンカツ実体験の赤裸々エッセイ「お見合い放浪記」を文芸社から出版させて頂きました。なぜお見合いの実体験なるものを書くに至ったかをこのじゅうぜん通信にまで図々しく登場し語らせてもらおう事にしましょう（笑）

私は、今はなき十善看護専門学校を平成3年に卒業し、そのまま十善会病院に就職しました青春とオンナ盛りをこの十善会病院で過ごしてきたというわけです。就職したての頃は石の上にも3年、25歳位で結婚するだろうという夢を描いていました。しかし、25歳の夢はあっけなく朽ち果て、大失恋を経験してコンカツが始まるわけです。しかし現実はそのなかに簡単にいくわけもなく、ことごとく上手くいかないお見合い。そんな私の実体験を自叙伝として書き残したいという思いが、なぜだかずっと心の中にありました。お見合いのみならず、きっと何らかの形で自分のありのままの姿を飾らずに表現したいと思っていたのだと思います。そんなある日、ふと目を通した新聞に文芸社の“原稿募集”の広告が目飛び込んできました。私は、書いて送るくらいやってみよう！別に笑われてもいいやあ！位の気分で原稿を送りました。すると、数日後に連絡があり「面白いから書き進めてみてください」と言われ、出版に至ったというわけです。出版を通して、たくさんの方々の温かい応援を頂きました。今回のことで私は、多くの人に支えられていたことに改めて気付いたのです。振り返ると退職したときが一番心身ともにどん底だったと思います。なにせ退職目前に下血で入院しましたから…。幸い軽症でしたが、その頃、支えにしていた言葉が2つあります。“後輩からは感性を先輩からは経験を学べ”“自分の前には道はない、自分の後ろには道はある”です。自分の世界に固執せず周りに心を開きながら自分の道を一步一步歩めば、最後の日に自分の道（人生）があったと思えるのではないかと思います。その人生の折り返し時点のアラフォーの私が過去を終焉させ、新たな一歩を踏み出すために選んだのが本の出版というわけです。病院には、自分とは全く違った価値観や人生観をもち、様々な歴史を生きてきた人たちが訪れ、入院してきます。そんな方々に接し、少しでも幅のある人間に成長していきたいと思う今日この頃です。応援して下さい十善会病院の皆様方にこの場を借りて深く感謝申し上げます。



社会福祉法人 十善会 十善会病院

〒850-0905 長崎市籠町7番18号

TEL:095-821-1214 FAX:095-824-4315

HP:<http://www.juzenkai-hospital.or.jp/>

